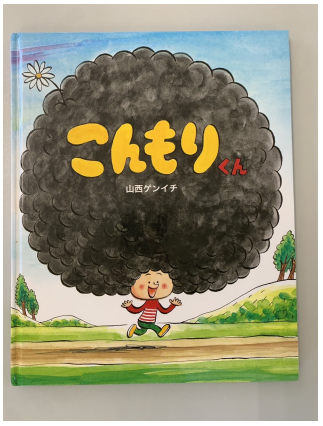
絵本をもとにした子どもとの対話的表現活動の実践
～ 絵本『こんもりくん』かみのけーランドへletsGO! ～

九州大谷短期大学幼児教育学科2年
秋本竜樹・安部紗華•安徳咲希•大石帆佳•緒方愛子•
奥深百•蒲池萌絵•行徳紗也加•杉山陽菜•林大生•吉田楓•吉田みのり

題材とした絵本：『こんもりくん』　文：山西ゲンイチ　　絵：山西ゲンイチ
出版：児童書出版社　　（第1刷）

タイトル：「こんもりくんと一緒に遊ぼう」



実践準備の担当：プロデューサー（秋本竜樹•緒方愛子）、音楽（安部紗華•奥深百）、記録・報告書（安部紗華）、会計（蒲池萌絵）、脚本（吉田楓•吉田みのり）、制作（行徳紗也加•杉山陽菜）、衣装（安徳咲希•大石帆佳）、買い物（蒲池萌絵）

実践時の担当：ネズミ（秋本竜樹•安徳咲希•大石帆佳•緒方愛子•蒲池萌絵•行徳紗也加•杉山陽菜•林大生•吉田楓•吉田みのり）、
絵本（奥深百）、音・演奏（安部紗華）、カメラ・音響（奥深百•吉田みのり）導入（安部紗華•奥深百）

1. 題材『こんもりくん』選定の理由

『こんもりくん』を選んだ理由は3つある。まず一つめは、表紙に興味を惹かれたからである。アフロの男の子はあまり絵本には登場しない個性豊かなキャラクターであるため選んだ。

二つめは、「かみのけーらんど」というテーマパークのような名前に楽しさを引きつけられたからである。「〇〇ランド」とつくテーマパークはいくつもあるが、それが「髪の毛」という自分の体にある、物の中に存在していたというあり得ない話なのがこの絵本の見どころの一つだと感じた。

三つめは、「協力する」という場面が描かれていることである。この絵本にはネズミさんにこんもりくんが髪の毛を切って外の世界に帰る場面が描かれている。行った年齢が4歳児の発達段階の特徴の一つとして「友達同士で遊べるようになる」姿がある。今回の絵本を通して友達と共に協力しあうことに繋がったら良いと思いこの絵本を選んだ。

（執筆者：林大生）

2.絵本の世界から遊びへの展開

『こんもりくん』のお話の中では、こんもりくんが自分の髪の毛の中にあるかみのけーらんどに入って、ネズミさんと過ごす場面がある。そのため、導入の中で子どもたちに耳を付けてネズミになって楽しめるようにし、導入を経てこんもりくんの案内でかみのけーらんどにみんなで行く流れをとった。初めは、耳を付けてもらった後に「箱の中身はなんだろう」という箱の中に入っている物を学生のいうヒントを元に考えて答えるという導入をする予定にしていた。しかし、「箱の中身はなんだろう」という導入をすると時間がかかってしまい

時間の配分を考えた時に手遊びの方が適切であると思ったので「一ぴきの野ねずみ」の手遊びをすることに変更した。また、かみのけーらんどの中にはネズミさん(学生)がいて最初にネズミさん(学生)の声かけで準備体操をしたりダンスをしたりした。
絵本の中でこんもりくんがネズミさんに手伝ってもらって、髪の毛の中のかみのけーらんどから出る場面がある。それを再現してネズミになった子どもたちにも一緒に「ガジガジ」とこんもりくんの髪の毛を切るのを手伝ってもらった。

　絵本の中でも最後にこんもりくんが出てきた自分の髪の毛を木につけて木ができるという場面がある。私たちはその場面を展開し、子どもたちにどの飾りを付けるかを選んでもらったり折り紙を破ってもらったりするお手伝いをしてもらった。そして、木にハートや星を型どった画用紙を張り付けて事前に準備しておいた折り紙を破った物を張り付けたスズランテープを木に張り付けた。また、木の飾り付けが終わった後に木の回りで子どもたちも一緒にもう一度ダンスを踊った。

（執筆者：吉田みのり）

3.実践に際して大切にしたこと

①子ども達との対話を大切にする。
　オンラインでの活動だと、子ども達がテレビ感覚で見てしまう恐れがあった。その為、問いかけの言葉を増やしたり、できるだけ子ども達の声に応えることで、子ども達との対話を大切にした。また、子ども達の様々な声に耳を傾け、出来るだけ全員が納得のいくようにすることで楽しく進められるようにした。

②物語の内容や流れを自然に掴めるようにする。
　『こんもりくん』の絵本の読み聞かせを最初に行い、「ズボッ」という絵本のセリフから劇を始めることで、物語の内容や流れを自然に掴めるようにした。また、絵本の読み聞かせと劇の繋ぎ目で、子ども達に役の自己紹介を行うことで、学生1人ひとりが何の役なのかが伝わるようにした。劇の終わりには、絵本に帰っていく様にカメラ外に外れ、絵本を読んで終わるという流れを作ることで自然に物語が終わるように意識した。「劇と絵本が繋がっている」と子ども達が感じられる事を 大切にした。

③子ども達と一緒に身体表現や遊びを楽しむ。
　劇の中にダンスを取り入れることで、楽しい雰囲気を身体で表現できるようにした。音楽のリズムやテンポに合わせ、ネズミを意識した振り付けや簡単に真似ができる振り付けを入れることで表現力が得られるように意識した。遊びでは、飾り付けのお手伝いをするという体で、子ども達が折り紙を破り「私たちも劇に参加しているんだ。」という気持ちになれるように意識した。また、ハートや丸、星など子ども達が惹き付けられるような形を用意し、髪の毛の飾り付けを楽しめるようにした。飾り付けの「ここに貼るー？」という声掛けに対して、子ども達が体を使って丸やバツをして意思表示することも楽しめるようにした。

(執筆者：大石帆佳)

4.内容について

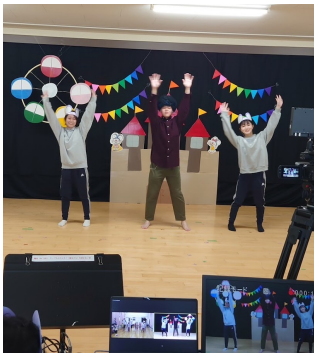
（1）　全体の構成

全体の構成を以下の①から⑦とした。

①子どもたちへの挨拶と導入
導入担当の2人が子どもたちに呼びかける。
導入として「いっぴきののねずみ」の手遊びを子どもたちと一緒に楽しむ。その後、話の前段階として、『こんもりくん』の絵本の内容の紹介と今日どんなお話の世界に行くのかの紹介として絵本の読み聞かせを行う。こんもりくんの絵本を途中まで読み聞かせをして次の場面に繋げていく。

②こんもり自己紹介、かみのけーランドへ
こんもりくんが登場する。こんもりくんだとわかるように自己紹介をし、「髪の毛の中に行ってみない？」と子どもたちに呼びかけ、わくわく感を引き出す。こんもりくんの「せーのっ」の呼びかけと同時に暗幕をおろし、かみのけーランドの世界に切り替える。
かみのけーランドのネズミが登場し再度かみのけーランドの紹介をし、見ている子どもたちにかみのけーランドを認識してもらえるようにする。子どもたちにネズミに変身して一緒に遊ぼうと声かけをする。その際、保育者、園を訪問している大学教員に手伝ってもらいながら子どもたちの様子を見て進める。

③ダンスして外の世界へ戻る
１）ダンスをする。
ダンス担当のネズミが登場する。子どもたちを「一緒に踊ろう！」と誘い、ダンスの前段階として準備体操を行う。１つの動きが終わるごとに「できた？丸？」と子どもたちと対話をしながら準備体操を進める。準備体操が終わりピアノの音が聞こえてきたらダンスの本番を始める。この時、画面がごちゃごちゃしないよう2グループに分かれて行う。ダンス中は子どもたちが振り付けに戸惑わないようにどんな動きをするのかをダンスに合わせて言う。ダンス終了後、「楽しかったね」と会話をし、子どもたちにも「楽しかった？」と問いかけ会話をする。



２）外の世界へ戻る
こんもりくんが「そろそろ帰りたいな、髪の毛切ってくれない？」とネズミたちにお願いする。子どもたちにも「こんもりくんを外に出してあげよう！ガジガジ手伝ってー」と呼びかけ、手伝いを依頼する。子どもたちと一緒にガジガジと手を動かす。髪の毛が切れて外に出られたことを表すため音量をフェードアウトし、画面を一度暗くし別のカメラに切り替える。マイク（全体）が切れている間にカーテンを閉め背景を変える。カメラが切り替わっている間に木の幹を準備する。
外の世界にでたら、髪の毛に見立てた制作物を持って登場する。「この髪の毛どうしよう」と悩んだあと、「あの木の幹にはめて木にしよう！」といい「ネズミさんたちも手伝って」とカメラを切り替える。よいしょよいしょと言いながら、ツリー担当のネズミとこんもりくんで木の幹にはめ、木にする。

④飾り付け
園に訪問している大学教員に折り紙を2枚ずつ(4分の1サイズ)配ってもらう。その折り紙をビリビリと子どもたちに破いて貰う。ツリー担当のネズミも折り紙を用意し子供たちと一

緒に破く。破り終えた折り紙を袋に入れる。破った折り紙を袋に入れて先生が風に乗せて飛ばす。その時に、「みんなも風を送って～」と子どもたちに協力を促す。先生が扉から出て行き、戻ってきたタイミングでカメラ外の学生が袋を飛ばす。このようにして、袋が風で飛んでいくような演出にした。その後、同じように折り紙を予め破いたものを貼ったスズランテープを用意して両面テープで木に張りつけた。そして、ハート・丸・星に切った画用紙をこどもたちに提示し、どちらを飾り付けするか決めてもらう。子どもたちが選んだものを木の周りにいるツリー担当のネズミが飾り付ける。この時に、直ぐに貼れるように木自体に両面テープを貼り、開始前にフィルムを剥がしておいた。貼る際にも「私ここにしようかな」などのように楽しそうに声を出しながら貼る。一つ一つの飾り付けが終わる毎に「いいね！」や「可愛くなってきたね」などのように飾り付けが楽しくなるような声掛けを行った。少し大きい大きさの丸・星・ハートを子どもたちに「どこに飾り付ける？」と尋ねながら貼る。子どもたちは、「上」「下」などのように自分の貼りたい場所を伝えていた。3つの形を貼り終え「みんなのおかげで飾り付けが完成したよ」の言葉で子どもたちに木が完成したことを伝える。「みんなにも見せようよ！」の声掛けを行った。

⑤ダンス

　ダンス担当のネズミが再び登場する。子どもたちを「木の周りで一緒に踊ろう！」と誘い、「立って立って」と促しの声かけをする。この時に踊りやすいようにツリー担当のネズミが木を後ろに下げる。ピアノの音が聞こえてきたらダンスを始める。最初に行った動きと同じ動きを行う。この時に、ツリー担当のネズミがマイクを使って「横」や「反対」などの動きを声に出すことで子どもたちが踊りやすいようにした。

⑥お別れ

ダンス終了後こんもりくんとダンス担当のネズミが「楽しかったね」と会話をし、子どもたちにも「楽しかった？」と問いかけ会話をする。会話が落ち着いてきたら、画面外の学生が「こんもりー」と呼びかける。この声にこんもりくんが「ママの声がする。そろそろ帰らなきゃ」と言い、お別れが近いことを知らせる。子どもたちに「遊んでくれてありがとう」と感謝の気持ちを伝えながらダンス担当のネズミと子どもたちとお別れする。こんもりは、「ただいまー！ママ」と言いながらカメラの外へと移動する。

⑦まとめ

「おかえり、こんもり。短い髪も似合ってるよ」と絵本に戻る。絵本の中で「おしまい」とする。その後、学生が全員カメラに写り、「ありがとう！」などの挨拶を行って終了する。

(執筆者：①～③杉山陽菜　④～⑦吉田楓)

（2）　子どもたちとの対話について

　今回の作品の中で子どもたちとの対話について取り入れたことは、①子どもたちの言葉やアイディアを受容し、反応を確認しながら実行すること。②楽しい空間の共有をすること。大きくこの2つを中心に、こどもたちとの対話の目標としていた。

①子どもたちに登場人物のねずみになって絵本の世界に参加してもらい、飾り付けを対話を通して行う中で、子どもたちの言葉や違う意見が飛び交う場合も必ず拾い、反応を確認しながら進めていった。子どもたちが反応しやすいように、飾り付けするものを2択に絞り選びやすいように工夫したり、声だけでは分かりにくい部分はジェスチャーを使って丸とバツを表現したりして対話を行った。2択で意見が分かれている場合は、飾りつける数を減らして両方貼ることを提案することで、どちらの意見も尊重することを意識した。子どもたち自身に飾りつける位置のアイディアをもらうことで、絵本の世界に一緒に参加し全員で1つの物を作り上げる楽しさを味わうことができるのではないかと感じた。出来上がった物に対しても、感想を伝え合ったり感謝を伝えたりすることで、充実感も味わえたのではないかと思う。

②楽しい空間の共有では、自分たちだけが楽しむのではなく、子どもたちにも「楽しかった？」と確認することで、楽しい空間の共有を行った。1日目、ねずみの耳がついた被り物を子どもたちにも付けてもらった瞬間から、子どもたちからねずみの鳴き声を真似した「チュー、チュー」という声が飛び交った。劇中に、ねずみの鳴き声を取り入れて会話する場面がほとんどなかったため、2日目は移動中や言葉の語尾に鳴き声を取り入れるなどをした。そうすることで、鳴き声を通して子どもたちと楽しい空間を共有できたのではないかと思う。また楽しい＝ダンスと結びつけて、ダンスも笑顔で楽しく踊った。子どもたちに合わせた簡単な振り付けで、子どもたちと一緒に踊った。学生だけが踊るのではなく、子どもたちも一緒に踊り「楽しい？」と確認し気持ちを共有することで、さらに楽しい空間作りやダンスを通した対話ができたと思う。

（執筆者：安徳咲希）

（3）表現の工夫

今回演出については権守くんの髪の毛の中を覗いてみるという世界観を失わずに、より没入できるような構成を考えた。

こんもりくんや髪の毛の中の世界、ねずみさんたちの様子を第三者視点から覗いてみるというコンセプトのため、カメラは定点で固定するという形を採用した。それにより、カメラを動かす際に起きるブレやピントのズレが世界観を壊す恐れも解消された。また、劇中でアングルや拡大縮小など動かすこともせず、固定のカメラの中で演者が画面の中を動くことによって没入できるように意識した。また、画面切り替えの際は暗くフェードアウトするようにし、「髪の毛の中の世界」であるという感覚を失うことがなかった。

画の中の道具や背景は最小限とし、演者の前に道具があることは避け、演者が主となるような構図であることによって余分な情報量を減らした。

演出においてこんもりくんが登場する際に定点カメラであることを活かし、下からワッと画面に現れるようにすることで、これから始まる物語に気持ちが切り替わることができた。またかみのけーランドの紹介をする時には暗幕をこんもりくんの後ろに置き、かみのけーランドを隠してからこんもりくんが下がると同時に現れるようにしたことでさらに世界を味わうことが出来た。

ネズミたちの踊りについても楽しさを保ったまま画面の情報量を減らすことを考え、人数を減らしたり踊りは簡単なものとした。
　子どもたちからちぎった紙を受け取る際には現地の先生と連携し、「みんなでフーッと吹いて飛ばして」「先生が持っていってる間に風に飛ばされていった」という流れを作ることで子どもたちのいる場所と劇の世界が繋がっているという気持ちになれるように工夫した。

（執筆者：秋本竜樹）

（4）音と音楽

　プレの時の話し合いの際にかみのけーランドの中で一緒にネズミと遊べるものは何かと考えた時、1番遊んでいるような様子を感じられるものがダンスだったため、ダンスを取り入れた。まず準備体操の部分は声だけで説明するだけでなく、そのダンス練習の際にもワクワク感を感じてほしいためBGMとして音楽を演奏した。最初はピアノで演奏していたが、音が大きすぎて声をかき消してしまった。これを改善するためにグロッケンを使って優しい音色でBGMを演出できるようにした。グロッケンを使用した時は、あまり声を邪魔することもなくとてもその場の雰囲気に合わせる事ができた。また、使用したフリーBGM（かえるのピアノ（こおろぎ作曲））は色々な動画編集の際に使われている音楽であり、誰もが聞いたことのある曲なので私たちや子どもたちにとっても親しみやすい曲を選んだ。

　ダンスの時はピアノで伴奏を行い、楽しい雰囲気作りを行った。「うさぎ野原のクリスマス（作曲:中川ひろたか　編曲:上田浩司）」音楽に合わせてダンスを踊ることは身体表現に繋がり言葉を使わなくても、子どもたちと楽しめるものだ。音楽を使うことで場の雰囲気を明るくすることができると感じた。また、伴奏の速さも子どもたちが踊りやすくわかりやすいように少しゆったりとしたペースで演奏した。強弱、速さも考えながら演奏することが大切だと気づくことができた。

　こんもりくんの髪の毛に飾り付けをしている際にもフリーBGMをグロッケンで演奏した。リハーサルをした際に飾り付けに集中しすぎて、静かになることがあった。そこに小さい音でBGMを流すことによって飾り付けの際も楽しい雰囲気で製作できるような演出をする事ができた。

マイクの使い方をもっと工夫するべきだったと感じた。また他にも楽器を使って、効果音を使い表現をよりわかりやすくするために工夫をしていきたいと感じた。

（執筆者：安部紗華）

（5）　プレ幼教こども劇場における子どもの姿と省察

　プレ幼教こども劇場では、少人数の子どもに対して子どもと対話しながら取り組むことが出来た。子どもたちにツリーの飾り付けのお手伝いを頼んだ時に私たちがひとつひとつ「まるとハートどっち貼る？」などと尋ねると、「まる」「ハート」と意見が分かれた。その際、多かった方の意見を取り入れた為、少数の意見を尊重することが出来なかった。その過

程を振り返って、両方の意見が取り入れられるように「じゃあこっちも少し貼ってみるね」と言った少数の意見や気持ちを尊重することが大切だと実感した。
こんもりくんがかみのけーランドの世界に入り、そこで出迎えたねずみさんが「みんなもねずみになってみようよ」と子どもたちも一緒にこんもりくんの髪の毛の中の世界観を楽しむことが出来るようねずみの耳をつけた。子どもたちは「ちゅーちゅー」と言いながらまるでこんもりくんの髪の毛の中の世界に吸い込まれるように楽しむ姿が見られた。
こんもりくんがかみのけーランドの中の世界から出られるようねずみさんたちがガジガジとお手伝いをしてもらうシーンがある。その中で「○○幼稚園のねずみさんたちもお手伝いしてくれるかな？」という声掛けを入れることで子どもたちも一緒にねずみさんになりきりガジガジと一緒にお手伝いをしてくれる姿を見ることが出来た。
子どもたちも参加して絵本の世界観に入り込めるようなお話の世界にする為にねずみの耳を一緒に付けたり、一緒にダンスをして体を動かし楽しむことをしたり、飾り付けをお手伝いしてもらう為に実際に子どもたちに折り紙を配り、ビリビリと破って子どもたちが作ってくれた装飾を風で飛ばしてもらうという発想に至った。その中で子どもたちがまるでこんもりくんの頭の中の世界に入り込み学生とオンラインで繋がり会話し合う楽しさを感じられたのではないか。
　また、オンラインだからこそ声が届かなかった、声が途切れて聞こえずらかったという反省点があったが、手で大きく丸を作り体で確認し合うことでよりスムーズにコミュニケーションをとることが出来た。

（執筆者：行徳紗也加）

（6）取り組む過程での改善と工夫

【練習からプレまで】

　劇をするにあたって『こんもりくん』の絵本やお話を知らない子どもが多くいると考え、こんもりくんの世界が子どもたちに分かりやすく伝わるよう、最初は絵本から始まり、途中から劇をして、最後も絵本を読んで終わることにした。背景は、こんもりくんの髪の毛の中の世界「かみのけーランド」にするため、暗幕にお城や観覧車などを作って貼り、雰囲気を出した。服装は、こんもりくんは絵本の中のものと同じ色の服にし、それ以外の人はグレーのトップスで合わせ、ねずみの耳をつけた。子どもたちにもねずみの耳を配り、付けてもらうことにした。導入では、ネズミと穴に入っていくことから「1匹ののねずみ」の手遊びに決めた。ねずみのダンスのシーンでは、子どもたちにも一緒に踊ってもらうことにした。子どもたちに自由に踊るように伝えると戸惑ってしまうと思い、ダンスの振り付けを言葉で伝えながら踊るようにした。ダンスが終わり、こんもりくんが家に帰りたくなったので髪の毛を切るのをねずみさんにも手伝ってもらうことにした。学生のねずみに合わせて園のねずみさんにも「ガジガジガジガジ」とねずみの歯で噛みちぎる仕草を一緒にしてもらうようにした。髪の

毛の中の世界から出てきたこんもりくんは、ネズミさんたちが切ってくれた髪の毛を木の幹にさして、木に見立てることにした。そのままでも良いがもっと可愛くしたいと思ったこんもりくんは、園のねずみさんに飾り付けの手伝いをお願いした。木に飾る折り紙を子どもたちと一緒にちぎって、袋に入れて先生に風で飛ばしてもらうことにした。そのため、子ども達には「ふーっ」と風を送ってもらうように協力を頼んだ。その後、事前に準備しておいたちぎった折り紙の袋を受け取り、園から風に飛ばされて学生のもとに届いたように見せた。まず、ちぎった折り紙を学生のねずみが貼り、次にハートや星、丸の折り紙を子どもたちにどれを貼るか、どこに貼るかを聞きながら飾り付けをしていった。子どもたちに尋ねる際には、「ハートと星どっちを貼る？」「丸は貼る？貼らない？」と子どもたちが答えやすいように２択の質問にした。飾り付けが終わると他の学生のねずみも呼んで、最後にまたダンスを踊り、楽しい状態で終われるようにした。人数が多いため、全員がカメラに映って動くとごちゃごちゃしていて見にくくなると思い、飾り付け担当のねずみ、ダンス担当のねずみ、ダンス担当の中でもさらに２つに分けた。カメラに映り、子どもたちが見た際にわかりやすいように心掛けた。また、ダンスを踊ったり、カーテンを閉めたりする際の雑音をマイクが拾ってしまうため、その都度ピアノのマイクやスタンドマイクにこまめに切り替え、少しでも雑音が減るよう工夫した。

（執筆者：奥深百）

【プレから本番まで】

プレ幼教劇場から本番までの間で、実際の子どもたちの様子や反応から様々な気づきや課題点、改善点が見つかった。それらを主に五つに分けた。一つ目として、子どもが学生の話すスピードについてこれておらず聞き取れていない場面、ダンスについていけていない場面があったという気づきから、全体的に話すスピードやダンスの動きが早いことが課題点として出た。改善点として、ゆっくりと話す、短く分かりやすい表現をすること、振りを簡単にして踊る速さを少し遅くする、分かりやすいように解説を入れながらダンスをする等、子どもたちが理解しやすい話し方を意識し、楽しくダンスが踊れるように工夫した。二つ目に、子どもたちは「ちゅうちゅう」とネズミになりきっていたが、学生はネズミになりきれておらず子どもたちとの温度差があった。このことから、まずは学生自身が役になりきることが大事だと気づき、手の形をグーにして移動してみたり、鳴き声を台詞の間に挟んだりとネズミになりきることを意識した。三つ目はカーテンを閉める際や木の移動時、拍手の際に音響に雑音が入ってしまっていることが課題であった。雑音が入ってしまうと、その音に気を取られたり集中が途切れたりすると考え、カーテンを閉めるタイミングや木の移動の仕方を工夫する、マイクの切り替えを活用する、拍手をエアーで行う等なるべく雑音が気にならないように努めた。四つ目は、おりがみを丁寧に千切る子ども、細かく千切る子ども、早く千切り終わる子ども等、子どもたちの千切り方は様々で終わる時間もそれぞれであった。プレや本番1日目では予想以上に丁寧に千切る子どもやゆっくりと千切る子どもがいた。そのため、早く終わった子どもは暇な時間となってしまっていたことや、時間が押してしまっていたことから予定していた通り進まなかった。これを踏まえ、折り紙の大きさをもう少し小さくすれば良いのではないかという案から折り紙一枚から四分の一へとサイズ変更を行った。変更後の本番では、千切り終わる時間がほとんど偏ることなくスムーズに進み、子どもたちも楽しんで活動に取り組む姿があった。五つ目は、飾りつけの際に、丸と星どっちがいい？という学生の質問に丸派と星派に意見が分かれてしまうことがあった。多数派の意見が採用された際に、少数派の子どもが落ち込む様子もみられた。このことから、少数派の意見もしっかりと取り入れることや積極的に発言した自分の意見が尊重される雰囲気であるように、みんなが楽しんで選択できるように、両意見とも取り入れてバランスよく貼り付けることを意識した。配置の際も、どこがよいか子どもたちに尋ねながら進めていく場面でなるべくみんなが納得できる場所をいくつか提案することを心掛けた。実際にこのように双方の意

見を取り入れながらバランスよく調整することで子どもたちも全員が納得して一つの木を作り上げることができていた。このように、決められたパーツを決められた位置に配置するのではなく、子ども達に選択してもらうことで主体的に参加できるように工夫をした。

（執筆者：蒲池萌絵）

（7）幼教こども劇場での子どもたちの様子と省察

幼教こども劇場での子ども達の反応は、ネズミになりきって「チュウチュウ」と表現していたり、私達の問いかけに身体を使って答えていたりする姿が見られた。

始めに、絵本の世界に入りやすいように手遊びを導入として取り入れた。歌いながら手遊びをしている子どもやスクリーンを見て手遊びを一生懸命している子どもの姿が見られた。手遊びが終わり、絵本の読み聞かせに入ると、こんもりくんに興味を持ってくれたり、絵を見てワクワクしている姿が見られた。この場面から、子ども達は「これからどんな楽しみがあるのだろう」などと想像しているのかなと感じた。

１日目の実践では、ネズミの耳の被り物を被ってもらう場面で、「嫌だ」と言ってなかなか被らない子どもがいた。その理由は、その子どもの気分ではなかったのではないかと考えた。また、子ども達はネズミの被り物に興味を持ってくれて、私達の声が届きずらい場面もあった。そこで、2日目は手遊びをする前に「ネズミさんになってみない？」などの言葉掛けをしたことで、「何が始まるんだろう」とワクワクしていたり、落ち着いて被ったりしている姿が見られた。子ども達はネズミの被り物を被ると、私達の質問に「チュー」と返事をしていたり、鳴き真似をしながら手で丸やバツを作って伝える姿が見られた。

ダンスの場面では、急にダンスを始めるのではなく、準備体操を取り入れた。子ども達はジャンプをしたりクルクル回ったりして、お友達や保育者と楽しそうに体を動かしている姿を見ることが出来た。私達が「みんなも一緒にダンスを踊ろう」と伝えると、子ども達は自信満々に「うん」と答えてくれた。ピアノの音楽がなり、私達がリズムに合わせて動くと、子ども達は私達の動きを真似して体を大きく動かしてダンスをしていた。ダンスが終わり、私達が「楽しかった？」と子ども達に聞くと「うん！」と笑顔で答えてくれたので嬉しかった。

ツリーの飾り付けの場面では、最初の飾り付けで子ども達に折り紙をちぎってもらった。私達が「折り紙をちぎって」と言葉掛けをすると、「えー」「なんで？」と反応する子どもがいた。そこで、私達が「ちぎってくれた折り紙を飾り付けしたいんだ」と子ども達に伝えると、集中して折り紙をちぎってくれた。折り紙を細かくちぎる子どもや大きくちぎる子どもがいた。ちぎった折り紙を袋に入れて、子ども達に「フーってして私たちの所まで届けて」と伝えると、子ども達は「えっ？！」と驚いていたけれど、一生懸命「フー！」と風を送ってくれた。折り紙が入った袋が私たちの所まで届くと「わぁー！」と驚いたり、嬉しそうに笑顔で拍手している姿が見られた。次に、丸やハート、星の形をした画用紙の飾り付けのお手伝いを子どもたちに頼んだ。私達が一つ一つ「丸とハートどっち貼る？」などと尋ねると「まるー」「ハート」と元気良く答えてくれた。私達は少数派の形も貼ることが出来るように、「丸って答えてくれたお友達もいたから少し貼ってもいい？」と子ども達に尋ねると「いいよー」と答えてくれたり、手で丸を作ってくれたりして

くれた。飾り付けが全て終わると、子ども達は「きれい」「かわいい」と言っている姿が見られた。
　最後に、こんもりくんやネズミさんたちとお別れをして、絵本の読み聞かせに戻ると、子ども達は集中して絵本を見ていた。絵本の読み聞かせ担当が「おしまい」と言うと、「もう終わり？」「終わるの早い」と言う子どもがいた。絵本の世界を楽しんでくれたのだと感じた。
　全体の振り返りとして、子ども達は体を動かすところは楽しく動かしたり、物事に取り組む時は集中していたりする姿を見ることが出来たので良かった。また、私達が一つ一つ子ども達に質問していたり、共有していたりしたので、スムーズに進めることが出来たと思った。そして、流れが同じではないので、子ども達は飽きずに最後まで楽しんでくれたと感じた。

（執筆者：緒方愛子）

5.取り組みを通して学んだこと、得たこと

【秋本竜樹】
　幼教こども劇場を通して、私は仲間と一つの目標をやり遂げることの難しさや成し遂げた時の達成感を知ることが出来た。リモートでの子どもとの関わりということで、実践ではどのような言葉を使って子どもたちに語りかけるべきなのか、またそれに対して、子どもたちの反応がどのように返ってくるのか分からないという不安があった。その中で、仲間たち一人ひとりのそれぞれの発想を取り入れ、様々な視点から実践での構成を組み立てていくことができた。時には、意見が食い違うこともあったが、それぞれの意図をくみ取る努力をし共に制作活動をしていく中で絆のようなものが芽生えたという実感がある。また、私は他のグループよりも多くサークルタイムを設けることができたと思う。サークルタイムを重ねることで共通認識をもつことができ、子どもたちに喜んでもらえるような内容に近付いていき、最後には冗談を言ったりして笑い会うことが出来た。そこから、お互いを尊重しながら意見を言い合える環境をつくれたことが、物事を進めていく上で大切だと学んだ。

【安部紗華】
　幼教子ども劇場を通して私は子ども達と画面越しでも楽しめる演出を考える大切さを学んだ。コロナ感染症対策のためリモートでの交流だったが、画面越しだからこそできたことを見つけることができたと思う。子どもたちがちぎってくれた紙を飾り付けするために現地にいた先生にお願いをして風で飛ばしてもらうという演出を行った。子ども達は一生懸命に紙に向かって「ふぅーー！」と息を吹きかけていた。まるで、本当に飛んできたかのようにこっち側の画面でキャッチをし、子ども達に「届いたよ」と声掛けをすることにより子ども達が嬉しそうな表情をしている様子を見ることができた。また、子ども達と一緒にダンスをする場面では、ダンスを画面越してするとなるとラグが発生し、やりにくいかなと最初は感じた。しかし、ダンスの振りを簡単にしたり繰り返していたり工夫をしていくことにより、子ども達も簡単に楽しめることができていたとう。このように子ども達がどんな場面であっても楽しめるような演出を考えていくことがこれからでも必要になってくると思う。それを踏まえてこれからも色々工夫をしていきたいと感じる。

【安徳咲希】
　今回のこども劇場を通して、臨機応変に対応することや様々な場合の展開準備の重要さを学んだ。子どもたちと一緒に絵本の世界に入り込んで楽しむ中で、実際の子どもたちの人数や発言、行動から新しい気づきや反省点を得ることができた。1日目はねずみの耳の被り

物を配るタイミングやかかる時間、飾り付けの時間が想定していた時間よりも時間を取ってしまい、後半部分を大きく削る選択をした。そのため子どもたちも急に終わったことで、物足りない感情を残してしまったと思う。その反省点を活かして2日目は、被り物を配るタイミングを前半に繰り上げることや飾り付けの大まかな時間を設定するなどの工夫を全員で考え子どもたちの反応を見ながらより楽しい時間を共有できたと思う。またねずみになりきるという点で子どもたちと学生の間で差が出来てしまったことも1日目の課題となった。子どもたちがねずみの鳴き声で返答したり踊っているのに対して、鳴き声を入れず会話していたため2日目では移動中や言葉の語尾などに鳴き声を入れる工夫も行った。そうすることで、絵本の世界観の表現により繋がったと思った。

【大石帆佳】
　幼教子ども劇場を通しての学びは、臨機応変に子ども達との対話を大切にすることである。準備の過程では、いかに物語の流れを子ども達に伝わりやすくするか、物語の雰囲気が伝わるように背景や服装を意識するか、などを大切にしていた。しかし、それだけでは子ども達との対話を大切にした劇ができていないことに気づいた。そこで、台詞の中に問いかけを増やしたり子どもの小さな声にも反応したりするように認識し直した為、対話を通して子どもの気持ちや意見を受け止めながら劇を行えたと思う。実践1日目は、時間がおしてしまい急遽省略した所があった為、子ども達が「もう終わり？」といった反応をしていた。2日目はそれを改善する為に、折り紙の枚数を減らす、被り物を先に被っておくというように時間を長くかけずに楽しめる工夫をした。その工夫もあり、2日目は想定通り劇が終わったので指定されていた時間内で全力で楽しめたのではないかと思う。この2日間で、臨機応変に対応することの大切さを学んだ。最後に、学生一人ひとり考える事が違うので、それぞれのやりたい事は沢山あったと思うが、学生同士思いを話し合い、折り合いを付けながら協力して行うことができていたと思う。

【緒方愛子】
　幼教こども劇場を通して、チームワークの大切さやオンラインで繋がって出来る遊びを考えるということを学ぶことが出来た。チームワークでは、一人一人役割を持ったが上手く話し合いが出来なかったり連携をとることができなかったりした。一人一人想像しているものや理想としているものが違うため、相手の意見を受け入れることが出来なかったと思う。だけど、「子ども達に楽しんでもらいたい」「完成度を高くしたい」という想いは一緒だったと思うので、少しずつ「ここはどうする？」や「いいね」などの会話が出来るようになったと思った。そして、準備の最初と最後にサークルタイムをした。最初にチームのみんなですることや終わっていることなどを共有したり確認をしたりしたことで、スムーズに準備に取り掛かることが出来た。最後には、どこまで準備が進んだのかや次回することなどを確認しクラスルームなどに共有したことで一つ一つ振り返ることが出来た。オンラインで繋がって出来る遊びを考えるということでは、子ども達がテレビを見ている感じにならないようにするということが難しいと感じた。今回、ダンスやツリーの飾り付けをする時に、子ども達の気持ちに共感したりお手伝いを頼んだりしたので、きちんと繋がることができたと思う。画面越しでも言葉掛けや子どもに送る視線は大切なのだと思った。

【奥深百】
　オンラインでの幼教こども劇場を通して、臨機応変に対応することや子どもたちに向けた劇を行うことの大変さを学んだ。子どもたちがずっと画面を見て学生が一方的に進めていくのではなく、子どもたちも一緒に楽しみながら参加することができるためにはどうすれば良いのかとても悩んだ。また、話の内容を全く知らない子どもたちに分かりやすく伝えるためにはどうすればよいのか、学生と子どもたちの温度差を無くすためにはどうすればよいのか話し合いを重ねた。練習からプレ、本番の1日目が終わる度にサークルタイムを行い、メン

バー全員で振り返り、改善案を考え、出し合った。サークルタイムでは、振り返り･反省点の共有以外にも、今日すること･次回することの予定の確認など細かく確認し、計画的に進めることができるよう努力した。プレや本番を通して、実際に子どもたちと画面越しに会話する中で、自分たちが予想していなかった発言が子どもたちから出ても慌てず子どもたちに合わせて対応したり、子どもたちの反応を見ながら声掛けをしたりなど臨機応変に対応しなければならない場面がいくつもあった。その都度、子どもたちの声や意見に耳をすませた。特に、髪の毛の木を飾り付けする際には、学生が「どっちがいい？」と2択の質問に対して少数意見も聞き逃さず、「じゃあ2つとも飾ろうかな！」と２つの意見をきくようにした。本番では、劇の終わりに「もう終わり？」と言ってくれた子どもがいて、私はその言葉の意味を“楽しく参加することができて時間があっというまにすぎた”ということなのかと受け止めた。自分たちも緊張しながらも楽しむことができ、学生の一方的な劇ではなく、子どもたちと一緒に劇を作っていけたので良かった。

【蒲池萌絵】
　今回の幼教子ども劇場を通じて、チームと協力する大切さを学んだ。子どもたちにとって分かりやすく、より楽しめる演出にするためには、チーム内での話し合いや意見を出し合うことが大切であると気づき、練習の際は開始前と終了後にサークルタイムの時間を設けた。サークルタイムでは互いに意見を言ったり案を出し合ったりして話し合いを行った。初めの方は、上手く伝わらないことや気持ちのすれ違いという部分もあり、雰囲気が良くないことも多々あった。しかし、次第にそれぞれが互いを認め合い尊重することができるようになり、気持ちも段々と一つになっていったと感じた。また、子どもたちとの対話的表現活動においては、対面ではなく、画面上でやり取りをする難しさを実感した。タイムラグなどの影響から声を拾いにくかったり聞き取りにくかったりと会話上のやり取りがスムーズにいかないこともあった。しかし、オンラインだからこそ「今から何が始まるんだろう」というわくわく感は対面で行うよりも大きく感じられるものだろうと思った。さらに、子どもたちは「ちゅうちゅう」と鳴きながらネズミになりきり、ダンス後は「楽しかった」と口にしていたことから、『こんもりくん』の絵本の世界を充分に味わうことができたのではないかと感じた。

【行徳紗也加】
　1日目でのねずみのお面を子どもたちに渡した際に「ちゅーちゅー」と子どもたちがねずみになりきっている姿が見られた。子どもたちの実際の声を元に2日目は学生たちも「ちゅーちゅー」と言いながら登場するシーンをつくり、更にこんもりくんの世界観をオンラインを通して楽しさを共有し合えたのではないかと感じた。絵本の中での「ズボッ」というシーンからこんもりくんの自己紹介、そしてかみのけーランドの紹介が入ることでよりこんもりくんのお話の世界に自然と導き対象年齢4歳児クラスの子どもたちも内容が入ってきやすかったのではないか。洋服の色を絵本の中のこんもりくんと合わせることやアフロを被りこんもりくんの存在を分かりやすいように再現し、ねずみさんたちの洋服の色を合わせることで誰がどんな役目なのかひとりひとり自分の役目を自覚し、子どもたちにもだれがどんな役か伝えることが出来た。装飾ではかみのけーランドを表現するためカーテンを暗幕に変え、お城や観覧車の装飾をした。より一層子どもたちも勿論私たち学生も『こんもりくん』のお話の世界に飛び込んで行くようなワクワクする有意義な時間になった。

【杉山陽菜】
　幼教こども劇場を通して、チーム全体が周りの状況を見ながら活動に向けて協力して取り組むことの大切さを学んだ。準備段階では役割分担をし、完成スケジュールを決めたことで準備がスムーズに進んだと感じた。また、それぞれが自分の仕事をこなしながら、足りない部分は空いている人が補い合う姿があり協力しあったことで作品を作ることができた。プレ

では、リモートでの交流だったが「チューチュー」とネズミの鳴き声をしネズミになりきったり、丸やバツを動きで教えてくれたりとうまく行った点と、子どもの反応を受け止めきれなかったり、動きや言葉が早く付いてきにくく子どもと学生にズレができたりなど反省点の２つを得ることができ自信と改善につながった。本番では、1日目はネズミの耳の被り物を配る時間や折り紙を千切る時間が予想よりも時間をとってしまったため、後半を大きく削った。臨機応変な対応をすることができたと思うが、子どもたちに物足りなさを残してしまったと感じる。2日目では、前日の反省点の改善案をサークルタイムで話し合い、被り物を配るタイミングや折り紙の枚数、全体を大まかに時間分けするなどの修正をし実践した。サークルタイムを行ったことで、グループの中で共通認識ができ、余裕を持つことができた。そのため、より子どもたちの反応を受け止めたり、言葉かけを変えたりするなど臨機応変な対応ができた。

今回の幼教こども劇場を通して、個人ではなく全体で話し合うことの重要性、周りを見て協力することの大切さを学ぶことができた。今回の学びを保育現場での活動に生かしていきたいと思う。

【林大生】

今回の幼教こども劇場を通じて私は、仲間の大切さについて学んだ。この『こんもりくん』という作品を作る際に私は主人公を演じたが、セリフの言い方や背景の制作などは周りにいたメンバーの支えもあって今回の作品が出来上がった。プレの感想で出たことを改善して、本番に臨んで上手くいった部分もあったが、1日目の時にアクシデントがあって自分がテンパってしまっていたがその後の反省会で皆んなも同じ状況だったけど冷静に対応しながら2日目の計画を立てて同じことを繰り返さないように改善して頑張った。練習の時にもカツラを取るシーンで私がカツラを取るのを忘れてしまったこともあった。その時に誰かがカツラを取ってくれるように提案したりなど一人ひとりが支え合って『こんもりくん』が出来たのだと感じた。あと、『画面越し』でも子どもたちが楽しんでくれていて良かった。ダンスの時に初めてのダンスだと思ったのだが、一緒に踊ってくれていたり学生の問いかけにもしっかり応えてくれたり楽しんでいて子どもたちと学生と先生方の協力のおかげでこの作品が出来上がったのだと感じた。

【吉田楓】

今回の幼教こども劇場を通じて子どもたちとリモートを通じて一緒に活動を行うことの難しさを感じた。『こんもりくん』を題材にする中で、子どもたちとどのような活動であれば一緒に楽しむことができるのかやリモートで行うということで、子どもたちの動きや言葉に臨機応変に対応することが特に難しかった。子どもたちがちぎってくれた折り紙を飛ばす場面では、実際に園に行かれる先生と打ち合わせを行い子どもたちに「届いたよ！」と伝えると嬉しそうな表情を見せてくれた。このことから、劇を行う私たちだけではなく、現場に行ってくださる先生方とのコミュニケーションや連携が大切だと思った。ダンスの場面では、プレ幼教子ども劇場を行って、動きが早いことなどから、子どもたちと学生の動きがズレてしまっていた。この点は、ダンスを踊る前に練習の時間を入れて子どもたちがダンスを少しでも覚えられるようにした。また、ダンスを踊っている時にもマイクを使って「上」「下」「横」「反対」などの声掛けを行った。声掛けがあることで子どもたちも分かりやすく踊り易かったのでは無いかと思う。

【吉田みのり】

私は幼教子ども劇場を通してオンラインで子どもと関わることの難しさや学生同士で協力して１つの物を作り上げていくことの難しさを実感した。オンラインでは子どもからの反応が返ってくるまでに時間がかかってしまったり、うまく伝わりきれないことなどがあった。返答が来るタイミングが分かりずらいので、学生と子どもの話すタイミングが被ってしまう

ことがある。そうすると、聞き取れなかったり聞き取りずらかったりすることがあったので大変だった。また、学生の方から尋ねると大勢の子どもたちが一度に返答してくれるので、そのために聞き取りずらくなっていることもあった。また、子どもの細かい様子が分かりにくいので子どもの様子に応じた声かけなども難しい部分があった。学生同士での協力の面では、12人の学生がいるので意見を交わし１つの方向に持っていくことが難しかった。しかし、先生の提案でサークルタイムを取り入れたことでみんなの意見や考えを共有でき、まとまりができてきたように思う。実践をしたことで学べたことも多くあり、とても良い機会だった。